「服従の欲望」をめぐる言説分析

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部　国際コミュニケーション学科
講師　　岡本　夢子
研究分野：フランス語圏文化　19世紀末文学　女性作家

「服従の欲望」をめぐる言説：　本研究は、フランス語圏の女性芸術家・作家が20世紀初頭から現代にかけて綴った「男性による支配への従属を欲望する」言説を、フェミニズム批評・表象学・文学社会学の観点から縦断的に分析するものである。

■ジェンダー平等の文学とは？

本研究は「服従の欲望」をめぐる言説を、フェミニズム批評・表象学・文学社会学の観点から縦断的に分析するものである。従来のフェミニズム研究は 「男性による支配への従属を欲望する」言説・表象を「女性の抑圧」あるいは「男性中心的言説の再生産」として退けて来た。しかし、「服従を肯定する女性の声」は、単なる内面化された男性による抑圧の結果ではなく、権力構造のなかで自己を構築し交渉する主体的行為として読み替えることができる。このような複雑な女性の声を可視化し批判的に検討することは、ジェンダー平等を新たな視点から問い直す営みである。

■文学場と女性作家たちの自己表現

本研究が対象とする作家たちは、いずれも主流の文学史から周縁化されてきた存在である。フレールをはじめとするシャンソン・レアリストの女性歌手は大衆文化の担い手として扱われ文学研究の俎上に載ることが少なく、ポーリーヌ・レアージュ（ドミニック・オーリー）の『0嬢の物語』やジャン・ド・ベール（キャトリーヌ・ロブ＝グリエ）の『イマージュ』は男性名義の匿名で出版された。ベルギー人女性作家キャロリーヌ・ラマルシュも近年、同じように服従の欲望を綴った作品を発表し評価されているが、日本では未紹介である。こうした作品群を扱う研究は、一見現代のイデオロギーに対立するように見えるかもしれない。しかし、逆にこうした女性の声を検討して学術的研究の空白を埋めることこそ、文学および社会の形成の中で不可視化された男女の性に対する不平等の是正に直結すると考える。

■文学賞と文学場

本研究は、文学・文化制度の透明性と包括性を批判的に問う研究である。2001年にフランスで創設されたサド文学賞は、これまで倒錯的・猟奇的とみなされてきた表現を文化的権威へと昇華させる制度装置であるが、その選考プロセスや正統化のメカニズムについての学術的分析は現時点では存在しない。受賞作品の中にはカトリーヌ・ミエの『カトリーヌ・Mの正直な告白』や最近『東への旅』が翻訳出版されたクリスティーヌ・アンゴなど女性作家たちの作品が含まれている（アンゴはこの賞を拒否している）ほか、沼正三の『家畜人ヤプー』など日本人も含まれている。本研究はこの文学賞研究を通じてエロティックな文学がいかに制度的に承認されつつあるかを明らかにする点でも、正統な文学に挑戦する試みである。

＜共同研究等の状況＞
・科研費　若手研究・課題番号26K15979　「暴力的支配を欲望する女性たちの文化表象と社会 フレールからラマルシュまで」